

# 研究発表予稿集執筆ガイド (テンプレート)

—体裁の統一を目指して—

鈴木 一郎, 山田 花子 (入研協大学), 岡本 太郎 (東京美術大学)

ここに要約を 200~300 字程度で記入する。論文題目は明朝体 16 ポイント太字, 副題がある場合は明朝体 12 ポイントで前後に 2 倍ダッシュ「——」を入れる。著者名は題目の後に空白行を一行入れ, 氏名 (所属) の形式で記入する。著者が複数の場合は全角コンマ「, 」で区切る。所属が同じ場合は, 最後の著者名の後に所属を記す。特に指定がない限り, 本文のフォントは明朝体 10.5 ポイントとする。

## 1 本文の体裁

### 1.1 字数, 行数と枚数

本文はA4判に2段組で24字×46行, 枚数は刷り上がりで6ページ程度とする。ただし, 最初のページは論文題目と要約が入るので, 30行程度となる。

### 1.2 ページ余白

ページの余白は上下30mm, 左右20mmとする。

### 1.3 見出し

#### 1.3.1 番号のつけ方

大見出しは「1」, 中見出しは「1.1」, 小見出しは「1.1.1」の形式で番号を振る。最後の番号にはピリオド「.」をつけない。番号と各見出しの間は半角スペースを空ける。

#### 1.3.2 フォント

大見出しと中見出しは**太字ゴシック**, 小見出しは**ゴシック**とする。大きさは本文と同じ10.5ポイントとする。

## 1.4 本文の記述

### 1.4.1 フォント

本文のフォントは明朝体10.5ポイントとする。ただし, 欧文および算用数字のフォントはCentury10.5ポイントとする。

### 1.4.2 全角と半角

和文を書くときはカッコなどの記号もすべて全角とする。半角カナは使わない。

### 1.4.3 句読点

句点は全角の「。」を, 読点は全角の「, 」を使う。

### 1.4.4 算用数字と漢数字

横書きの文章なので, 数字は原則として算用数字「1, 2, 3…」を用いる。ただし, 「第一步」「一生」など漢数字を使わないと不自然な場合は漢数字を用いる。

## 2 注と引用

### 2.1 注

注をつける場合は, 本文の該当個所に半角の上付き文字で<sup>1</sup>と番号を振る。注の内容は, 本文の後, 文献リストの前にまとめて記載する。

### 2.2 引用

#### 2.2.1 原則

本文中で文献に言及する場合は, 原則として, 著者名 (出版年), または (著者名, 出版年) の形式にしたがうこと。後者の場合, 著者名と出版年の間に半角のカンマおよびスペースを入れる。たとえば, Russell による1991年の文献の場合, (Russell, 1991)とする。

インターネット上の資料を引用する場合は, 著者名, 掲載日 (掲載年のみも可。不明のときはn.d.と記載) とする。たとえば, 大学入試センター (2011年2月3日)あるいは大学入試センター (2011)とし, 掲載年不明のときは大学入試センター (n.d.)とする。文献リストには, 著者名, 掲載日 (あるいは掲載年, あるいはn.d.), 資料題名, サイト名 (入手先), URL, (閲覧日)を記入する。具体例はこのガイドの最後に示してある。

#### 2.2.2 引用する場合

文献から直接引用する場合, 必ずページ数を明記する。ページ数は出版年の後に半角コロンと半角スぺ

ース「:」で区切り記載する。  
(山田, 2002: 55)

### 2.2.3 さまざまなケースの表記法

複数の文献に言及する場合は半角セミコロンと半角スペース「;」で区切る。

(岡本・佐藤, 1989; Clark, 1985)

同一著者による複数の文献を参照する場合は、各文献の出版年の間は半角コンマと半角スペースでつなぐ。

(見田, 1996, 2006)

同一著者による同じ出版年の文献が複数ある場合には、出版年の後に半角アルファベットを順につけて区別する。

(鈴木, 2000a, 2000b)

共著の場合は邦文文献ならナカグロ「・」で、英語の場合は and でつなぐ（その他、ドイツ語なら und, フランス語なら et など）。ただし 3 名以上の場合はファーストオーサーのみ記載し、「ほか」[et al.]をつける。

(岡本・佐藤, 1989)

(Treiman and Yamada, 1993)

(内田ほか, 2014)

(Lane et al., 2016)

訳書の場合は（原著者名, 原書の出版年 訳者名 訳書の出版年）の形式で記載する。

(Trow, 1961 天野訳 1981)

韓国語, 中国語など和文・欧文以外の文献については著者名をカタカナ, 漢字あるいは欧文で表記する, たとえば, (イムジンテク, 2012) のように。ただし文献リストには, もとの文献との対応がつくように工夫する。たとえばハンゲル表記も併記する, あるいは DOI を示すなど。

### 2.2.4 文献リストの書き方

本文で言及または引用した文献のみを, 注の後に 1 行空けて**参考文献**という見出しに続けて, 和文・欧文にかかわらず, 著者の姓のアルファベット順に記載する。なお, 雑誌論文の巻号は, 巻数に続けて半角丸カッコ内に号数を記載する。ただし, 巻ごとに通しページ番号がある場合は号数を省略してよい。具体例は

このガイドの最後に示してある。フォントサイズを 9 ポイントとする。

## 3 図表

### 3.1 図表番号の付け方

図・表別に通し番号を振る。図のキャプションは図の下に, 表のキャプションは表の上につけ, 番号とキャプションの間は半角スペースを空ける。キャプションはセンタリングする。

### 3.2 表示方法の例

#### 3.2.1 表の場合

表 1 センター試験志願者数・受験者数の推移

	志願者数	受験者数
1990 年度	430,542	408,350
1992 年度	472,098	445,508
1994 年度	531,177	498,729
1996 年度	574,115	534,751
1998 年度	597,271	549,401
2000 年度	581,958	532,797
2002 年度	602,090	553,465

注) 表の注がある場合にはここに書く

#### 3.2.2 図の場合

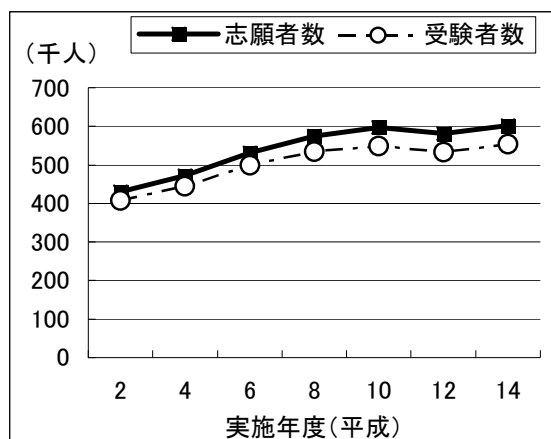


図1 センター試験志願者数と受験者数の推移

注) 図の注がある場合にはここに書く

図や表は, マーク, 線種, 背景色など工夫し, モノクロ印刷で判別できるようにすること。また図の解像度や字の大きさにも配慮し判読できるようにすること。

## 注

- 1) 注は本文の後、文献リストの前に、本文で言及した番号順に記載する。
- 2) 本文と注の間は 1 行空け、注と文献リスト（参考文献）の間も 1 行空ける。
- 3) フォントサイズを 9 ポイントとする。

## 謝辞

必要ならば注と文献リスト（参考文献）の間に前後 1 行空けて書く。フォントサイズを 9 ポイントとする。

## 参考文献（文献のフォントサイズを 9 ポイントとする）

- Clark, B. R. (1985). *The School and the University: An International Perspective*, University of California Press.
- 大学入試センター (2011年2月3日). 「平成23年度大学入試センター試験志願者数及び受験者数等」 大学入試センター [https://www.dnc.ac.jp/sp/data/shiken\\_jouhou/h23/shiganshasu\\_data/shigansha\\_jukenshasu.html](https://www.dnc.ac.jp/sp/data/shiken_jouhou/h23/shiganshasu_data/shigansha_jukenshasu.html) (2019年2月26日).
- 池田 央 (1999). 「試験方法の技術革新」 柳井晴夫・前川眞一編『大学入試データの解析：理論と応用』現代数学社, 254-263.
- Lane, S., Raymond, M. R., and Haladyna, T. M. (eds.) (2016). *Handbook of Test Development* (2nd ed.), Routledge.
- Mare, W. (1999). "University Entrance Examinations in 15 Countries," *Journal of International Education*, 50(1), 156-189.
- 見田宗介 (1996). 『現代社会の理論：情報化・消費化社会の現在と未来』岩波新書.
- 見田宗介 (2006). 『社会学入門：人間と社会の未来』岩波新書.
- 中島直忠 (1986). 『世界の大学入試』時事通信社.
- 岡本太郎・佐藤春夫 (1989). 「『英語』試験問題の出題形式に関する比較研究」『大学入試センター研究紀要』20, 1-20.
- 鈴木一郎 (2000a). 「推薦選抜における評価の妥当性と信頼性」『入研協大学紀要』30, 105-129.
- 鈴木一郎 (2000b). 『大学入試多様化の現状』入研協出版.
- Treiman, K. and Yamada, D. (1993). "Trends in Educational System in Japan," in Y. Shavit and H. P. Blossfeld (eds.), *Persistent Inequality: Changing Educational System*, Westview Press, 229-250.
- Trow, M. (1961). *The Second Transformation of American Secondary Education*, Oxford University Press (天野郁夫訳(1981).『アメリカ中等教育の構造変動』東京大学出版会).
- 内田照久・橋本貴充・鈴木規夫 (2014). 「18歳人口減少期のセンター試験の出願状況の年次推移と地域特性—志願者の2層構造化と出願行動の地域特徴—」『日本テスト学会誌』10(1), 47-68.

山田花子 (2002). 「本学入学者の『理科』入試得点と高校での履修状況の関連——入研協大学の場合」『大学入試研究ジャーナル』12, 50-56.